

教育長室だより

第 24 号
2021.3.11

教育長室だよりが2ヶ月あまり空いてしまいました。

本日、3月11日は東日本大震災の10周年ということで、大々的な報道がなされています。語り継がれることで、わたしたちに大切なことを忘れないようにさせてくれているようにも思えます。

○

新型コロナウイルス感染症はいくつもの波を起こしながら、なかなか収束の目処が立ちません。なんとか少しでも早く気の休まる生活を取り戻したいものです。

今回はコロナ対策に明け暮れた今年度を振り返りながら、その中で考えたことについて書いてみます。

○

まずは、学校での対策の大変さです。

さまざまな学校の運営規準やマニュアルが出され、それに沿った対策を進めています。朝の検温の確認、授業での換気や3密回避、手指消毒や手洗いの習慣化、放課後の様々な箇所の消毒、濃厚接触者への配慮や自宅待機要請など数え切れないほどの対策を行っています。

結果、児童・生徒の感染は町内に限らず最小限に抑えられています。町内では小・中各1名の感染者が出ましたが、学校内での感染は起こっていません。というか起こさせないように取り組みました。

○

子どもたちは真摯に決められた対策を守って行動しています。指導とそれに応える子どもたちの行動があってこそ今の状況が保たれているのだと思います。

むしろ大人が見習うべきことが多いのではないのでしょうか。

○

次に、コロナに関連する誹謗中傷など人権問題のことです。

感染拡大の初期、つまり、昨年春頃、県外ナンバー車への嫌がらせなど、少々恥ずかしい事象が県内でも見られました。事実でない噂が広く流れるということも少なからずありました。

わたしたちの心には弱い部分があり、心配や不安を他者への攻撃に変えてしまうくせがあります。“あの人のあんな行動が感染を広げるんだ”、“もしかしてあの人も感染しているんじゃないの”、“心配なので学校(職場)に来ないでほしい”などなど…。学校も(おそらく職場も)感染には可能な限りの対策をとっているはずですが、ですからその学校(や職場)から特に連絡がない場合は安心して登校(や出勤)をしていいのだと考えるべきだろうと思います。

憶測による誹謗中傷の怖さは、それによって傷つく人だけでなく、そういう大人の発言や行動を子どもたちが見ているということなのです。

○

学校教育が大事にしている人権教育は、部落差別を始め様々な問題について考える教育ですが、いじめやいわゆる“コロナ差別”についても取り組んでいます。弱い立場の人に寄り添う心情も理解させたいと思います。その学びはしかし、すぐに強固なものになるわけではありません。社会の身近な大人の言動で、もろく崩れることも少なくありません。

わたしたち大人は、教える前にまずわたしたち自身の言動で子どもたちに良い影響を与えることができるようにしたいものです。

○

もう一つ気になることは、1年以上続いているコロナ禍の中で、わたしたちの利己心や身勝手さがあらわになってきている点についての心配です。

10年前の東日本大震災の時には、津波や原発被害の当事者と遠くから見守る人とに分かれていました。遠くから見守る場合には自分自身の環境としては直接の打撃はほぼないので、余裕があったのも確かです。ですから東北の人々の悲しみを共有したり、進んでボランティアや支援に関わる心情が盛り上がりました。このときに象徴的な言葉である“絆”という言葉が広がりました。

○

今回のコロナ禍では国民すべてが当事者となり、様々な不安が国民を襲いました。

コロナ感染そのものへの不安、社会経済の停滞状況の中での生業の不安、受験や就職、結婚などに関わる将来への不安…このほかにも様々な不安が身の回りにあふれています。こういうときには当然わたしたちはまず自分や家族のことを考えます。それは無理もないことですが、一方で他者への思いやりや寛容な態度などが小さくなってしまったことは残念なことに感じます。

○

医療関係者の過酷な状況や飲食業の方々の厳しい状況など、共感できる状況も広く知らされていますが、まだ世の中にはっきり知られていない苦難もたくさんあるに違いありません。コロナ禍はわたしたちの心からゆとりを奪い、視野を狭くする働きがあるように思います。

○

大人の役割の大切な一つに、“子どもにとっての良きモデルとなる”ということがあるとされています。

「子どもは大人のいうとおりしないが、するとおりにする。」という言葉があります。この「大人」を「親」や「教師」に置き換えるとわかりやすいでしょう。“背中で教える”というような言葉もあるとおり、子どもは世の中の大人の後をついていくものようです。子どもがどう育つかは大人の教育というよりも大人の生き方にかかっています。

○

世界中が大きな困難の中にある今だからこそ、わたしたちが子どもに対して担う役割はさらに大きくなっている…そのことを痛感します。